豊田ホタルの里ミュージアム研究報告書 第 16 号 : 89-111 頁 , 2024 年 3 月
Bull. Firefly Museum of Toyota Town. (16): 89-111, Mar. 2024

《報告》

日本文化，特に文学における秋の螢について

後藤好正

神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

日本と中国の古典文学では，ホタルの季節性はそれぞれ違った形で現れている．「中国古典の世界では，螢は，晩夏から，とりわけ初秋にかけての景物であった」(『漢詩の辞典』)，「螢は秋のものとしてうたわれることが多い」(『中国文学歳時記 秋』)，「中国において，ホタルは，詠われる季節が圧倒的に秋であるのも特徴的なことである」(『中国の四季 漢詩歳時記』) など，中国では秋の景物とされている．これは中国のホタルが秋に発生するアキマドボタル *Pyrocoelia rufa* であることによるとされている（上野，1969 ; 黒川ほか，1989 ; 朱，1995 など）．それに対し日本では，初夏に発生するゲンジボタル *Nipponoluciola cruciata* が一般的であり，清少納言が『枕草子』一段に

夏はよる．月のころはさら也，闇もなを，ほたるの多くとびちがひたる．又，たゞ一二など，ほのかにうちひかりて行もおかし．雨などふるも，おかし．　（陽明文庫蔵本・新日本古典文学大系 25）

と夏の夜の情景を描写したように，夏の景物として扱われてきた．

日本文学では中国文学を規範として受容し模倣したため秋螢が用いられる一方，平安時代，日本の風土に相応した夏の景物として確立した．その後，ホタルは夏の景物として描かれるものの，秋の螢も度々現れる．和歌から派生した連歌では夏の螢だけでなく秋の螢も詠まれるようになり，中国とは違った日本的な秋の螢観も形成されていく．

本稿では日本文学を主とした日本文化における「秋の螢」について，各分野での用例と変遷について概観し，いくつかの問題について考察する．さらに，保科（2017，2019）が問題提起している，多くの日本人がホタルを初夏ではなく真夏に発生すると思っている要因について考えてみたい．

凡例

1）引用にあたり，ホタルの漢字表記は「螢」に統一したが，その他の漢字の旧字体は通用字体に改めた．踊り字はそのままとし，漢詩の訓点や送り仮名は省略した．
2）時代区分については，次の通りとした．平安時代 : 前期（782 ～ 900）・中期（901 ～ 998）・後期（999 ～ 1086）・院政期（1087 ～ 1184），鎌倉時代 : 前期（1185 ～ 1221）・中期（1222 ～ 1298）・後期（1299 ～ 1333），室町時代 : 前期（1334 ～ 1391）・中期（1392 ～ 1467）・後期（1468 ～ 1568），安土桃山時代（1569 ～ 1602），江戸時代 : 前期（1603 ～ 1680）・中期（1681 ～ 1788）・後期（1789 ～ 1867）．

1. 日本本土のホタル

日本にはホタル科の甲虫が 50 数種ほど生息するが，一般に“ホタル”と言えば，ゲンジボタルかヘイケボタル *Aquatica lateralis* のどちらか，または両方を指す．

ゲンジボタルは 14 ～ 26 mm の大型の種で，本州・四国・九州の河川などの流れに生息する．発生期は 5 月下旬から 6 月下旬頃で中旬頃が最盛期となる．九州ではやや早く，東北地方や高地などの寒冷地では遅くなる．曲線的に飛び，時に高く飛びあがる．東日本では 4 秒に 1 回，西日本では 2 秒に 1 回程，ゆっくりと尾を曳くように強く光る．ヘイケボタルは 6 ～ 10 mm の小型の種で，北海道から九州まで分布し，主に水田や湿地などの止水域に生息する．直線的に飛び，あまり高く飛ぶことはない．1 秒に 1 回程，不規

則に発光する．この2種については明治時代に近代生物学が導入されるまで別種として認識されておらず，当然のことながら古典文学でも区別されることはなかったが，多くはゲンジボタルを念頭に表現されていると考えられる．

ヘイケボタルの出現期については本稿の内容に関わってくるので詳しく見てみたい．

東（1935）：平家螢は幾分出現が遅れて（六月）中旬から下旬にかけて最盛となる．何れも七月上旬は未だ大分生き残ってゐるが，中頃迄には大概のものは死滅して終ふ．まれには九月頃になっても一匹二匹暗夜の路上を飛ぶものがあるが，これはむしろ異例である．

大場（1986）：通常6月中旬～8月下旬．稀に11月上旬の記録もある．発生期は長く，発生の最盛期が明瞭ではない．

保科（2019）：［福井県］大雑把に言うならゲンジボタルの成虫発生最盛期は6月上旬，ヘイケボタルの最盛期は6月下旬である．ヘイケボタルの方は8月頃に出現する個体もいるが，ホタルとはようするに初夏の昆虫であって，真夏の昆虫ではない．

松田・黒田（2013）：［愛媛県大洲市］6月初旬に発光個体が確認されはじめ，約3週間経った6月下旬から7月初旬に個体数が最大になる．成虫の発光期間は，2回目の発生と思われる事例をのぞけば，おおむね二ヶ月程度である．

松田ほか（2008）：［神奈川県横浜市栄区］初認日は5月下旬のこともあったが，6月上旬が多かった．（中略）終認日は7月下旬から8月上旬までが多かったが，8月下旬におよぶこともあった．

同じ横浜市でも，筆者が1980年代に調査した北西部のデータでは，発生期は概ね7月上旬から8月下旬，初認の早い記録は6月25日，終認の遅い記録は9月8日であった．

また，神奈川県横須賀市野比地区の調査では3つの谷戸[注1)]で発生期が異なり，水田を生息地とする谷戸とアシ原湿地を生息地とする谷戸では約1ヶ月湿地のほうが遅かった．倉田（2010）は愛知県豊田市のヘイケボタルについて，「今年のホタルの初飛翔は6月5日のヘイケボタル．（中略）この数年間5月の連休に田植えをするようになってからヘイケボタルの発生が早まったものと考えられる．それ以前，5月の中旬以降に田植えをしていたころは，6月の末から7月にかけて飛翔していた．もっと前になると6月の梅雨時に田植えをしていたころは，7月から8月の旧盆あたりまでヘイケボタルが出ていたことを思い出した」と述べているし，柏崎市[(1)]でも「湿地や田んぼに生息するヘイケボタルは，本来ゲンジボタルが見られなくなるころ発生し，8月にお盆頃まで見られるのが普通でした．近年は，ゲンジボタルとともにヘイケボタルも発生しています」とある．このように，止水性のヘイケボタルは水田や湿地といった生息環境の違いや田植の時期によっても発生時期が変化する．

注1）関東地方の丘陵地の浅い浸食谷の呼称で，谷地・谷津等とも呼ばれる．

2. 平安朝詩歌における秋螢と夏虫

2-1. 平安時代前期の漢詩

日本文学で奈良時代以前に“螢”が用いられることは少なく，またその使用法も『日本書紀』の比喩,『万葉集』の枕詞,『懐風藻』の螢雪の故事という観念的なものであった．日本文学で初めて景物として現れるのは，平安時代前期の827年に成立した勅撰集『経国集[*1]』においてであるが，それは

岸螢落兮火微　秋可哀兮　　「重陽節神泉苑．賦秋可哀」仲雄王・巻一

という秋の景物としてであった．現存する平安前期の詩賦で，季節が明らかなホタルを詠じた詩はわずかであるが，仲雄王以降にも次の詩賦があり，どちらも秋螢である．

明明仍在　誰追月光於屋上　皓皓不消　豈積雪片於床頭　「秋螢照帙賦」紀長谷雄『和漢朗詠集[*2]』上・夏

秋帳収螢不見階 … 合浦明珠透出懐　　「及第作」島田忠臣『田氏家集』[*3]

平安朝前期の漢詩文に秋螢が詠じられた理由を，山崎（1984）は「中国詩文を尊重するあまり，実際の季節よりも中国の典拠を重んじて秋の螢が生まれたものと思われる」と，奥村（1991）は「平安時代の日本漢詩文にみられるこれらの秋螢は，中国文学を権威ある典拠として重んじ，積極的に模倣しようとした当時の風潮を反映し，中国的な季節観によった結果であると思われる．詩人たちにとっては，たとえ現実の季節と矛盾していようとも，作文の際には漢学の知識を踏まえる方が重要だったのである」としている．

平安朝文人貴族が作文に必要な知識として用いた類書『初学集』『芸文類従』や詩文集『文選』『玉台新詠』『白氏文集』などで，季節が特定できる詩賦では秋螢を詠じた作品がほとんどである（奥村，1991；朱，1995 など）．

ただし，道真の「燈絶　二絶・其二」（『菅家後集』）の「秋天未雪地無螢」について川口（1966）が「雪があれば，窓辺の雪で書をよもうものを，螢が居ればそれをあつめて書を照らそうものを，孫康，車胤の故事による．秋だから，ともに不可能だと，ちょっとしたしゃれである」と注している通り，このホタルは夏のものである．

＊1：日本古典全集第 1 回（1926，日本古典全集刊行会）による．
＊2：新編国歌大観による．
＊3：『田氏家集索引』（和泉書院索引叢書 26，1992）による．

2-2. 夏の景物として詠まれたホタル

ホタルは『万葉集』では 1 首も詠まれず，平安時代に入ってから新しく発見された素材の 1 つである．丹羽（1992）は「上代の作品に余り例がなく，平安朝になり，所謂国風暗黒の時代以降に急速に文学作品として詠まれる例の多くは，漢詩文の影響の下に新しく文学素材として獲得されたもの」で，ホタルも同様であるという．現存最古のホタルを詠んだ和歌は

晴るる夜の星か河辺の螢かもわが住むかたの海人のたく火か　　『伊勢物語』[*4]八十七段

で，『新古今和歌集』巻十七・雑歌中は作者を在原業平としている．その後，古今集撰者達によって，一挙に多彩なホタルの和歌が制作された（丹羽，1992）．

最初の勅撰集『古今和歌集』[*5]の螢詠和歌は 2 首のみで，どちらも恋の部に配されているが，そのうちの

ゆふされば螢よりけにもゆれどもひかり見ねばや人のつれなき　　紀友則，巻十二・恋二

は，『寛平御時后宮歌合』（寛平 5 年〈893〉以前）で夏歌として詠まれており，恋の象徴とともに夏のものでもあった．次の勅撰集である『後撰和歌集』巻四・夏には次のよみ人しらずの歌が採られている．

つつめどもかくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひなりけれ

“夏虫”は『藻塩草』[*6]（宗碩著，永正 10 年〈1513〉頃成）巻十二・虫部「虫」に「夏虫と云は四色也，火取虫，螢，蝉，蚊也と云々」とあり，ホタルの他にヒトリガやセミ・カを指す場合もあるが，掲歌の詞書に「桂のみこのほたるをとらへてといひ侍りければ，わらはのかざみのそでにつつみて」とあることにより，ホタルであることは明らかである．

後撰集以降の八代集では，後拾遺集（2 首），詞花集（2 首），千載集（2 首），新古今集（3 首）で夏の部に配されており，他は恋（3 首），物名（1 首），神祇（1 首），釈教（1 首），雑春[注 2)]（1 首），雑（4 首）で秋に採られた例はない（括弧内は収録首数）．また，部立がされている私撰集・私家集でもホタルの歌は夏と恋の部に配されていて，夏の素材となっている．

では，漢詩文の影響を受けた和歌には秋の螢は見られないのだろうか．

『後撰和歌集』に載るホタルの歌は 2 首で，前述の夏虫の歌の他には

ゆく螢雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ　　業平朝臣，巻五・秋上

である．この歌は『和漢朗詠集』巻上・夏「螢」に引かれた許渾の「蒹葭水暗螢知夜，楊柳風高雁送秋」に拠った，「いわば翻訳であり，たんに，はやく雁の来る秋の季節になれという歌」（上野，1969）で，歌意からす

れば晩夏の歌である．

秋の螢を詠んだ最初は，平安前期の寛平 4 年 (892) 頃に是貞親王の家で催された『是貞親王家歌合』の次の 2 首である．

あきくればみやまざとこそわびしけれよるはほたるをともしびにして

おく露にくちゆくのべのくさのはやあきのほたるとなりわたるらむ

続く中期の応和 3 年 (963)7 月中旬に，一条摂政伊尹によって催された『宰相中将君達春秋歌合』に

あき

春ののにもゆとかききしわらびにももえこそまされあきのほたるは

わらびのかへし，春の御方

はかもなきあきのほたるを春ののにもゆるわらびにさらにたとへじ

の 2 首が見られる．丹羽（1992）が「(この 2 首）の例を最後として，以後の和歌では『秋の螢』の例は未見であり，有ったとしても其の例はわずかであろう」と述べているように，中期以降では康平 5 年 (1063) に比叡山延暦寺の塔頭無動寺の賢聖院で催された『無動寺和尚賢聖院歌合』の

あきたちてさはべのくさもいろづけばすまふほたるもひかりましけり　　永尋

の 1 首，平安後期から鎌倉初期の公卿・歌人，藤原良経の私家集『秋篠月清集』に

ともなくて草葉にやどる秋ののにほたるばかりやよはのともし火

の 1 首が確認できるだけである．

平安朝和歌では秋の螢はわずかな例に留まり，日本的季節感に基づいた夏の歌として詠われる．

注 2）拾遺集巻十六の部立は「雑春」だが，ホタルの他にホトトギスなどの歌もあり，実際には春・夏である．したがってこの 1 首は夏の螢である．

＊ 4 : 新編日本古典文学全集による．
＊ 5 : 以下，和歌の引用は新編国歌大観による．
＊ 6 : 内閣文庫蔵本［国書データベース］による．

2-3. 和漢朗詠集の撰集

ここでは，藤原公任が和歌と漢詩文の佳句集である『和漢朗詠集』（11 世紀初頭成）において，漢詩文と和歌との異なる節物のホタルの扱いについて見ていきたい．

奥村（1991）は『和漢朗詠集』が重要な原拠としたとされる漢詩の佳句選『千載佳句[*7]』（大江惟時撰，963 年以前成）の構成が中国的なものであり，基本的な部類意識が類書である『初学記』とよく似ていることを指摘している．これに対し『和漢朗詠集』の部類項目を見ると，上巻には四季を配し，下巻は雑とされている．『千載佳句』では大きな項目をなしていた四時部・時節部が上巻・四季の各部に，地理部・人事部が下巻・雑部のなかに組入れられ，天象部（月・雨など）・草木部（水草・梅など）も項目として独立させず，各小項目が四季･雑のなかに適宜配されているなど『千載佳句』とは構成が大きく異なっており（奥村，1991），『和漢朗詠集』が和歌集的な構成であることはすでに諸注釈者によって指摘されている．

『千載佳句』四時部から『和漢朗詠集』上・夏「螢」に採られた唐詩は次の 2 句である．

螢火乱飛秋已近　辰星早没夜初長　　元稹

蒹葭水暗螢知夜　楊柳風高雁送秋　　許渾

『千載佳句』では元稹の詩句は晩夏に，許渾の詩句は秋興の項目に採られており，いずれも中国的季節観に基づいている．『千載佳句』「早秋」の許渾の詩句「一声山鳥曙雲外　万点水螢秋草中」も，句中の秋草の語により本来は秋螢であったことは明らかであるが，『和漢朗詠集』では夏「郭公」に配されている．

日本人の佳句は，前出の紀長谷雄の賦句と橘直幹の「山経巻裏疑過岫　海賦篇中似宿流」であり，両句とも『初学記』「映作帙秋螢詩」に似た詩題「秋螢照帙賦」の中国的な秋螢である．

撰者公任は『和漢朗詠集』を撰集する際に，全体的には和歌集的な部立を優先させ，これらの佳句が中国的な秋螢であることを承知しながらも，「螢」の項目を夏部に配置するという日本的な季節観に一致させている．『和漢朗詠集』に続く『新撰朗詠集』（藤原基俊撰, 12 世紀前半成立），鎌倉中期の『和漢兼作集』（撰者未詳），さらに時代が下った江戸時代前期に編集された五山漢詩集『翰林五鳳集』でも全体は和歌集的な部立で編集されており，秋螢の詩が夏部「螢」に配されている．

＊ 7 : 早稲田大学図書館蔵本［早稲田大学図書館古典籍総合データベース］による．

2-4. 平安時代中～院政期の漢詩

天徳 3 年 (959)8 月 16 日に村上天皇の主催で行われた最初の詩合では，詩題「螢飛白露間」で菅原文時が「秋風露白巻簾居，閑見残螢飛漸疎」と，橘直幹が「露深秋景欲蕭疎，螢火高飛鶴唳初」と秋螢を詠じている（『天徳三年八月十六日闘詩行事略記』[＊8]）．また，同時代の橘正通の詩題「池辺翫月」「螢火幽光消不見，鷺糸寒色混難尋」（『新撰朗詠集』[＊2]上・秋）は，幽かな光が名月の輝きで見えなくなる秋螢である．

平安後期では一条天皇が詠じた「翠箔燈籠秋耿々，　碧雲星透暁煌々」（詩題「晴螢穿竹見」）（『類聚句題抄』[＊9]（別称『類題古詩』）があり，この詩では竹林を翠箔に，ホタルを燈籠になぞらえている．寛弘 2 年 (1005)8 月 17 日に詩題「林池秋興」で行われた藤原道長邸作文会で，大江以言は「露滴暗叢螢火湿，　風吹曲岸鷺糸寒」（『新撰朗詠集』上・秋）と，林池の秋の風情を露・螢・涼風・白鷺で表現している．院政期にも

巻舒久廃秋螢去　軸軸図書塵自埋　　「近曽聊書秋興以寄前金吾幕下…」　藤原忠通『法性寺関白御集』[＊8]

蒹葭洲裏秋螢乱　桐柏山西夕日懸　　「穿竹紅桃見」藤原実守『和漢兼作集』[＊2]巻三・春部下

と秋螢が見られる．

後期から院政期の詩人の作品が集められている『本朝無題詩』[＊10]（撰者未詳，12 世紀中頃成）には，夏の螢が多く登場する．惟宗孝言は「合浦珠還似感秋」（「翫螢」巻二・動物）と晩夏で詠じている．他にも夏を背景とした詩に，藤原明衡「夏日優遊興味餘 … 紅燭自連螢影疎」（「夏日作」巻四・夏），惟宗孝言「莓苔径暗螢光乱」（「夏日遊仙遊寺」巻九・山寺中）や藤原周光の「藤床筠簟葛衣軽[注3] … 万点宿流水暗螢」（巻四・夏）・「林鐘林暗乱螢輝」（「夏日池亭即事」巻六・池台）・「非火空燃万点螢」（「夏日泉亭即事」巻六・泉亭）がある．一方秋の詩に現れる，藤原通憲の「空疲鑽仰聚螢業」（「秋日即事」巻五・秋）・「螢幌携深筆一双」（「秋夜即事」巻五・秋）や藤原茂明「秋有閏余造化功 … 螢雪幾年雖嗜学」（巻六・林亭）はいずれも車胤の螢雪の故事を踏まえたにすぎず，わずかに“秋螢”の語が藤原明衡の「学思車氏拾秋螢」（「暮春即事」巻四・春）に用いられている以外，秋の景物として詠じられた詩は見られない．

『和漢朗詠集』で「螢」が夏部に配されたように，後期以降の漢詩は日本の季節感に沿った夏の景物として作られることも多くなり，秋螢とともに詠まれていくようになる．

注 3）藤床は藤葛で作った長椅子，葛衣は葛の繊維で作った衣でいずれも夏用である．
＊ 8 : 続群書類従（訂正三版）第 9 輯・文筆部（1992）による．
＊ 9 :『類聚句題抄全注釈』（和泉書院研究叢書，2010）による．
＊ 10 :『本朝無題詩全注釈』（新典社注釈叢書，1992-94）による．

2-5. 仲夏と晩夏，和歌における異なる夏の季節性

夏の景物となったホタルであるが，より具体的な時期が詠まれている歌がある．

さみだれやこぐらきやどのゆふざれをおもてるまでもてらすほたるか　　道綱母『道綱母集』

螢火はこのしたくさもくらからずさ月のやみはなのみなりけり　　和泉式部『和泉式部集』

“五月雨”は梅雨の異称，“五月闇”は梅雨時の夜の闇である．『源氏物語』でも，光源氏が方違えで訪れた紀伊守邸でホタルを見たのは「長雨晴れ間なきころ」（第 3 帖「帚木」），ホタルの光で玉鬘を照らし出したのは「五月雨になりぬる愁へをしたなひて」（第 25 帖「螢」）で，ともに梅雨のさなかである．これらから

平安朝の人々はホタルを特に陰暦 5 月，現在の 6 月頃のものと認識していたことがわかる．

平安末期に政権を握った平清盛の弟忠度に

秋ちかくなりやしぬらんきよ滝の川せすずしくほたる飛びかふ　『忠度集』

という歌がある．「秋近くなったのだろうか，清滝の川瀬は涼しくてホタルが飛びかっている」という歌である．忠度と同時代の院政期から鎌倉前期の慈円，俊成女，定家，家隆といった歌人達も秋が近い夏，すなわち陰暦 6 月の晩夏の螢を詠んでいる．もうゲンジボタルは姿を消しているが，ヘイケボタルはまだ姿を見ることもある．しかしこれらの歌は，ヘイケボタルを詠んでいると見るよりも，『和漢朗詠集』の元稹の句「螢火乱飛秋已近」を踏まえて作られたと考えた方が良いだろう．それは院政期に詠まれた次の歌

夏たけて秋もとなりになりにけりすだく螢のかげをみしま江　藤原隆房『朗詠百首』夏部

ゆくほたるかねてくもぢやおもふらむかりなきぬべきかぜのけしきに

藤原良経『秋篠月清集』上・夏部

の，歌題が「螢火乱飛秋已近」「螢火秋近」であることからも明らかである．

平安朝歌人は夏の素材であるホタルを仲夏と晩夏という異なる 2 通りの時期で詠作したが，“晩夏の螢”は中国的季節観である秋螢を新たに日本的な季節観の夏へと移し替えて詠まれたものと言えるのではないだろうか．

3. 中・近世の詩歌の秋の螢

3-1. 中世の漢詩

中世の漢詩の中心となったのは五山の禅僧たちである．江戸時代初期の元和 9 年 (1623) 頃に成立した五山の漢詩撰集『翰林五鳳集』[*11]（以心崇伝ほか編）には

秋螢何意照鰥床　開闔隨風残夜長　丹鳥不知比狄約　幾生作得到鴛鴦　「孤螢」月舟

数点秋螢書幌中　喜君夜読業将終　華堂銀燭酔吟客　漫愛飛過風露叢　「聚螢斎」西胤

など所収されている 42 首のうち，季節が明らかな詩句のほとんどが秋螢で，夏の螢は熙春龍喜の

五月池辺興不恒 … 山螢数点明於昼　「池亭見螢」

が唯一である．

貴族の漢詩では，鎌倉時代初期の「池塘水激螢疑夜，　庭院蓬飛草識秋」（「月明風又冷」三条長兼『資実長兼両卿百番詩合』[*8]），南北朝時代の「風前尚在紅灯影，　野外先看白露秋」（「螢」守遍『守遍詩歌合』[*2]），室町後期の「螢渡銀河天寂寥，　秋扇未損有人撲」（「螢渡星河」後奈良天皇，『本朝詩英』[*12]巻四）に秋螢が見られた一方で，鎌倉後期の正和 3 年 (1314) に行われた『詩歌合』[*2]で「水辺夏」の詩題で詠じられた 4 首はいずれも夏の螢となる．

この時代の確認できた貴族の作品はごくわずかでしかないが，中国との交流が盛んであった禅僧が中国詩文の規範性を強く受けて秋螢で作ったのとは違い，貴族達は平安以降も引き続き季節は一定しなかった．

＊ 11 :『大日本仏教全書』第 144 冊（1914，仏書刊行会）による．
＊ 12 : 詩集日本漢詩（汲古書院）による．

3-2. 江戸時代の漢詩

近世になると漢詩の担い手は禅僧から儒者へと移っていく．前期を代表する儒者･漢詩人である林羅山は，

縦無社燕去窺硯　応有秋螢残映嚢　「丙申重陽次春信律詩之韻」『羅山先生詩集』[*13]巻二十二

夏日簾前双眼青 … 分映隨宮数斛螢　「次読耕子夏草詩韻」同・巻五十五

と夏と秋の両方で詠じている．このような詠作は石川丈山や伊藤仁斎，元政などにも見られ，前期～中期

の漢詩人梁田蛻巖も同様である．一方で，蛻巖と同じ時代を生き，唐詩を典範とした新井白石の詩はいずれも秋を背景としている．

中期には荻生徂徠に始まる古文辞派が盛んとなるが，古文辞派は唐詩の模倣を詩作の方法としており，基本的にはホタルは秋の景物として詠じる．徂徠学から後に朱子学に転じた清田儋叟や相国寺の詩僧大典顕常に秋で，古注学の村瀬栲亭や徂徠門で明の格調派を志向した高野蘭亭には夏の螢を詠じた詩がある．また，古文辞派から折衷学派へ転じた龍草廬，朱子学派の江村北海，古文辞派から宋詩風へと詩風を変化させた六如庵慈周は夏と秋で詠じている．

中期の秋螢の作例として，徂徠門の服部南郭と大内熊耳，ならびに幾人かの詩を掲出する．

数点流螢照薄幃　縦是秋風吹不定	「流螢篇」服部南郭『南郭先生文集[*12]』四編巻三
螢度西宮夜色微…婕妤欲撲停秋扇	「流螢篇」大内熊耳『熊耳先生文集[*14]』正編巻四
梧桐一葉報新秋　月色帯煙螢火流	「秋夜即事・其一」清田儋叟『孔雀楼文集[*14]』巻二
負郭水村塵事稀…不覚秋螢入衲衣	「秋夜宿竹田僧坊」龍草廬『草廬集[*12]』四編巻六
梧桐白露冷西宮　数点秋螢流小風	「秋螢」江村北海『北海詩鈔[*12]』二編巻五
竹屋燈昏人語稀　流螢入坐定中衣	「秋夕咏螢」慈周『六如菴詩鈔[*12]』初編巻五

その後も後期から明治初期にかけて，菅茶山，頼春水・春風・杏坪の兄弟，北條霞亭，篠崎小竹，広瀬旭荘らが夏の螢を，草場佩川は秋の螢を，日謙道光，藤井竹外，遠山雪如，村上仏山らは夏と秋で詠じ，江戸時代の漢詩におけるホタルの季節は最後まで安定しなかった．

＊13：『林羅山詩集』（1979）による．
＊14：『五山文学集 江戸漢詩集』（日本古典文学大系 89, 1966）による．

3-3. 中世以降の和歌について

鎌倉以降も晩夏の螢は多くの歌が詠み継がれているが，鎌倉中期になると「晩夏螢」の歌題が現れる．また，業平の「ゆく螢…」に拠った歌が晩夏の歌として詠まれてもいる．

秋の螢も江戸時代までわずかながら詠まれている．

時よりもあはれとぞみる夏虫の影よわり行く秋のゆふぐれ 古集に，螢火飛来促織鳴	藤原家隆『御室五十首』秋
螢とぶゆふかげ草のしら露にはたおる虫も秋と鳴くなり 早秋	葉室光俊『閑放集』巻三・秋歌
草の原飛ぶ螢にもとほからずおもひしものを秋かぜのやど 懐旧	下冷泉為政『碧玉集』秋部
残るてふ秋のほたるをひろふまで老しらぬ年の昔ともがな 秋のはじめつかた，ほたるのたかくとぶをみて	烏丸光弘『黄葉集』巻十・雑部
衣手の涼しくもあるかさよ更けて螢とぶなり秋風のうへに 秋のほたるをみて	木下長嘯子『挙白集』巻二・秋歌
初雁の声だにきかでわかるめる玉と見えても行くほたるかな 秋稀恋	通直妻『林葉累塵集』巻七・秋歌中
秋草に残る螢の影ばかり露のたまたまみるよはぞうき かふ内の国くさかの里に在りし時	武者小路実陰『芳雲集』恋部
蘆が散る秋の入江の夕やみに光とぼしくとぶほたるかな 夜虫	上田秋成『藤簍冊子』局一

家隆・光俊の歌は鎌倉時代，為政の歌は室町時代，光弘以下は江戸時代の作である．また，

秋の虫なくや思ひの草葉より出行く玉ととぶほたるかな　　正徹『草根集』

秋の歌とて

空の色は水よりすみて天川ほたるながるるよひぞ涼しき　　契沖『漫吟集』第六・秋歌上

などのように，「(鳴く) 虫」や「天の川」「稲妻」「月」など秋の歌題とともに詠まれている歌も見られる．さらに秋には消え去る夏の螢を詠んだ以下の歌もある．

初雁

秋風をつげし螢の影もなき野沢におちて雁ぞ鳴くなる　　正徹『草根集』

神明院観清興行に，江早秋

乱れとぶ入江の螢影きえて残る漁に秋風ぞふく　　望月長孝『広沢輯集』秋歌

4. 連歌・俳諧・狂歌と秋の螢

4-1-1. 連歌

和歌から派生した連歌は複数の作者が長句と短句を交互に詠み連ねた詩歌の形式のひとつであり，ホタルは和歌と同様に夏の素材として詠まれた．国際日本文化研究センターの「連歌データベース」には 1332 年の「称名寺連歌」以降の作品が検索でき，このデータベースを活用した．

『菟玖波集』[*15]（文和 5 年〈1356〉序）第三夏連歌には

心ある草のしげみの螢かな — 秋ちかしとや誰もしるらむ

が採られている．「草の茂みに宿る螢には風情がある」との前句に，付句は「螢が草に宿って飛ばないのは秋が近づいてきたからだと誰もが知っているだろう」である．付句の作者，後嵯峨院は鎌倉時代の天皇（在位 1242 ～ 1246 年）で，この付句は平安末期以降詠まれはじめた晩夏の螢の和歌と同想である．ホタルが秋を背景に詠まれている古い用例は，

ひかりすすしき — つきやしらたま／みたれてや — はつあきかせに — とふほたる

『文安雪千句』第三，文安 2 年 (1445)10 月 18 日

であるが，その前段階として螢詠句の前後に秋の景が詠まれていたと考えられる．その用例として前句では

にしにふく — はつあきかせの — すきのまと／ほたるののこす — いのちのともしひ

『紫野千句』第二，延文 2 年～応安 3 年 (1357 ～ 1370)

があり，また，付句に秋の景が続く用例としては，

いにしへの — いかなるたまそ — とふほたる／ならへるつかの — くさのはつあき

『文安雪千句』第十，文安 2 年 10 月 18 日

がある．

このように，螢詠句の前句・付句に秋の景が詠まれるようになるのは「涼し」という言葉を介したのではないかと考えている．例えば「つきかけの — なかるるみつは — すすしくて／つゆにもにたり — くさのほたるひ」(『看聞日記紙背』何船，応永 15 年〈1408〉)，「ほたるやくるる — かけみたるらむ／さはみつに — すすしきかせの — おとそひて」(『寛正年間百韻』何路，寛正 3 年〈1462〉）のように前句･付句に「涼し」を含む例がいくつも見られる．

『伊勢物語』[*4]四十五段で「夜ふけれ，やや涼しき風吹きけり」とあるように，日が暮れると日中の暑さもやわらぎ風も涼しさを感じられる．また，ホタルが水辺に生息することや，その光も涼しさを感じさせたことであろう．それが，初秋の涼しさへと意味を変えることによって秋の季節と結びついたのである．こうして連歌では，ホタルは夏と秋との季節を転じさせる言葉となる．実際に『永正年間百韻』何船（永正 13 年〈1516〉1 月興行）では

まつたてる — みつはいわねの — なつのかけ／かせのようよる — ほたるとふそら／あしかきの — すまひはかなき — あきのきて

と，ホタルを介して夏から秋へと季節の移り変わりがされている．ここからさらに進んで秋を背景にホタルの句が詠まれるようになり，秋の螢と詠まれるようになったのではないだろうか.

秋の螢が最も早く見られるのは大永 3 年 (1523)10 月 23 日興行の『月並千三百韻』の 71 句

ほのかにもーあきのほたるのーみかくれて

で, その後の『永禄元年花千句』第六（永禄 1 年〈1558〉),『飯盛千句』第六（永禄 4 年〈1561〉),『永禄年間百韻』裏白（永禄 7 年〈1564〉),『大原野十花千句』第四（元亀 2 年〈1571〉),『嵯峨千句』第五（元亀 4 年〈1573〉）など室町後期～安土桃山時代になると秋の螢が多くなる.

また，江戸時代前期に出された『連歌大発句帳』[*21]には連歌師昌叱の

秋風に玉よる秋のほたるかな

の発句も見られる.

連歌で詠まれた秋の螢のイメージを拾ってみると,「ほたるすくなし」(『大野原十花千句』第五, 元亀 2 年),「かけきえて」(『弘治年間百韻』弘治 2 年〈1556〉）の様に, 秋ともなると盛りを過ぎたホタルは数も減り, 徐々に姿を消していく．また，その光も「かけうすくなる」(『聖廟千句』第四，明応 3 年〈1494〉),「かけかすかなる」(『称名院追善千句』第一，永禄 6 年〈1563〉),「ひかりもうすく」(『石山四吟千句』第七，天文 24 年〈1555〉) と，弱々しく幽かである．そして「あきのさひしさ」(『那智籠』巻下，永正 13 年〈1516〉),「あはれなり」(『池田千句』第三，永正年間〈1504 ～ 21〉初頭）と，総じて季節外れの「寂しさ」「哀れさ」を感じさせるが，こうしたイメージは次の俳諧へと受け継がれていく.

＊ 15 :『校本菟玖波集新釈』（福井久蔵著作選集，1981）による.
＊ 16 : 連歌の引用は「連歌連想語彙データベース」による.
＊ 17 : 古典文庫による.

4-1-2. 和漢聯句

和漢聯句は室町時代から江戸時代前期にかけて盛行した文芸で，連歌の式目に従って複数の作者が和句と漢句を詠み継いでゆく．残されている資料は少ないが，連歌と同じように和句・漢句ともに夏の螢と秋の螢が詠まれている．室町前期，室町後期～安土桃山，江戸前期の元和・慶長のそれぞれの時期の作例を掲出する.

〈室町前期〉

憐燭鼎来衡 — 秋風のふけはほたるのたえ／＼に	大永三年六月五日和漢百韻
星合の影みる空のやゝふけて — のこるほたるをみたす秋風	年次未詳和漢百韻

〈室町後期～安土桃山〉

雲ますゞしきのきの玉垂 — 風にゆく螢のひかり秋みえて	天文十九年四月二十八日和漢聯句
籠光遭月妬 — 秋のほたるを思ともみよ	弘治二年八月和漢千句・第八
露雫木の下道は絶やらで — 秋螢翳復燃	永禄十二年四月九日和漢聯句
雨気の空につきをまつ暮 — みだるゝも秋の螢は幽にて	天正十三年三月十二日和漢聯句

〈江戸前期〉

涼しさにならす木陰の道遠み — 夕は秋の螢とびかふ	慶長二年二月十七日和漢聯句
残書向流忘 — 暮わたる秋の河せにとぶ螢	慶長三年正月二十八日和漢聯句
手ならふもまだそのきわはたど／＼し — 照秋螢僅残	慶長十六年二月十一日和漢聯句

連歌に準じて詠まれているため, 連歌と同様の秋の螢のイメージ「たえだえに」「幽かにて」「僅残」といった表現が使われている.

＊18：和漢聯句の引用は和漢聯句作品集成による.

4-2-1. 俳諧の秋の螢，季語と発句

読み捨てにされていた俳諧の連歌は，室町時代後期から江戸時代初期に独自の文学として確立されていく．俳諧でもホタルは夏の景物であるが，季寄・歳時記に秋の詞として「秋螢」「秋の螢」が見られる.

季語としては『増山[＊19]の井』(季吟編, 寛文 3 年〈1668〉刊),『俳諧[＊20]をだまき綱目』(竹亭著, 元禄 10 年〈1697〉刊),『誹諧[＊7]新式』(鷺水編，元禄 11 年〈1698〉刊),『誹諧[＊21]手提燈』(貞山編，延享 2 年〈1745〉跋),『俳諧[＊7]歳時記』(馬琴著, 享和 3 年〈1803〉刊）は「秋の螢」を,『俳諧[＊21]田毎の日』(山奴著, 寛政 10 年〈1798〉刊）は「秋螢」を 7 月に所出している.

〈貞門俳諧〉

江戸時代初期の貞門俳諧は，縁語や掛詞などの技巧を用い，洒落やおかしみを主としていた．貞門俳諧の秋の螢の句には次ものがある.

螢火や吹けす秋の風の口	氏重『犬子[＊19]集』(重頼編，寛永 10 年〈1633〉序)
秋ロや風(ふう)とふきけす螢の火	流水『旅[＊22]衣』(友意編，延宝 1 年〈1673〉序)
秋風に逃尻見する螢かな	正章『正[＊19]章千句』(正章編，正保 4 年〈1647〉刊)
盆過てきえぬ螢や仏の火	安明『崑[＊19]山集』(良徳編，慶安 4 年〈1651〉刊)
行螢や雲のうへまであげ灯籠	俊次『崑山集』

業平の「ゆく螢 …」を踏まえた句.「あげ（上）灯籠」は盂蘭盆の時，竿の先に吊して門外に高く揚げる灯籠で，高灯籠とも言う．高く舞い上がるホタルの光を上燈籠に見立てた.

〈談林俳諧〉

貞門俳諧の次に起こるのが，新奇さをねらった自由奔放な談林俳諧で，奇抜な着想・見立てと軽妙な言い回しを特色とする．談林俳諧が主流となったのは延宝期を中心とする 10 年と短いため，秋の螢を詠んだ句も少ない.

秋までもある螢火やもえしざり	一武『ゆめ[＊19]み草』(休安編，明暦 2 年〈1656〉刊)
秋なれや螢むなしく猿の尻	『続境[＊19]海草』(顕成編，寛文 10 年〈1670〉跋)
秋迄や火の取残し飛螢	如塵『点[＊23]滴集』(編者不詳，延宝 6 年〈1678〉刊)
秋来ぬとおどろく枕に螢みだれ	宗円『阿[＊19]蘭陀丸二番船』(宗円編，延宝 8 年〈1680〉跋)

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(藤原敏行，古今集巻四・秋一）を踏まえた句.

〈蕉風ほか〉

しの竹を杖する秋の螢哉	乙州『孤[＊23]松』(尚白編，貞享 4 年〈1687〉刊)
風の秋に消たる草の螢かな	団千『翌[＊24]たのむ』(至芳ほか編，延享 1 年〈1744〉刊)
低う飛ブ螢や団扇置てから	五仙『古[＊25]今俳諧明題集』(凉袋編，明和 1 年〈1763〉刊)
露ほとは光らぬ秋の螢かな	作者不知『類[＊26]題発句集』(蝶夢編，安永 5 年〈1776〉刊)
逃す手を離れぬ秋のほたる哉	千柳『俳[＊27]諧かれ蘆』(李流編，享和 2 年〈1802〉刊)
気短に秋の螢の光哉	廃律『新[＊26]類題発句集』(蝶夢編，寛政 5 年〈1793〉刊)

ゲンジボタルに比べて早いヘイケボタルの光り方を「気短に」と表現した.

秋風に歩行(あるい)て逃る螢かな	一茶『志[＊19]多良』(一茶著，文化 10 年〈1813〉稿)

＊19：古典俳文学大系による．
＊20：福井市立図書館蔵本［デジタル福井アーカイブ］による．
＊21：『誹諧手提燈』（東京大学総合図書館洒竹文庫本），『俳諧田毎の日』（八戸市立図書館蔵本）［国書データベース］による．
＊22：『旅衣十種千句』（近世文学資料類従・古俳諧編46，1975）による．
＊23：俳書叢刊による．
＊24：関東俳諧叢書4巻（1994）による．
＊25：建部綾足全集2巻（1986）による．
＊26：俳諧文庫23編（1901）による．
＊27：福井県古俳書大観による．

4-2-2. 俳諧「残る螢」について

初秋のホタルの季語には「秋の螢」「秋螢」の他にもう一つ「残る螢」がある．

松永貞徳の『俳諧御傘[＊28]』（万治2年〈1659〉刊）には「螢はのこるとしても夏也」と，松江重頼の『毛吹草[＊29]』（正保2年〈1645〉刊）に「螢 残も夏」とあり，やや時代の下った李由・許六編の俳論書『篇突[＊19]』（元禄11年〈1698〉序）には「残る螢，誹諧にては秋也．連哥には夏とす」とある．『はなひ大全綱目[＊7]』（景三著，延宝3年〈1675〉刊）には7月として所出されているので，連歌では夏の詞であった“残る螢”は，続く初期俳諧でも同じく夏であったものの，延宝の頃には初秋の季語へと変化したのだろう．

秋の季語としては『俳諧袖かがみ[＊30]』（寸長作・蘆中校，延享1年〈1744〉刊），『俳諧二見貝[＊7]』（松宇編・素文補，安永9年〈1780〉序），『増補[＊29]／改正俳諧歳時記栞草』（嘉永4年〈1851〉，馬琴著・青藍補）などに7月として所出されているが，『篋[＊30わくかせわ]蘆輪』（千梅選，宝暦3年〈1753〉刊）の巻之三・七月には

一秋ノ螢　夏ヲソク生シタル螢ノタマ／＼七月迄モ飛カフヲ云ナリ．残ル螢ト混スヘカラス．残ル螢ハヤハリ夏ナリ．螢ハ五月暫ノ内ノモノニシテ残ルト云ハ六月エ残ル意ナリ．依テ夏ナリ．句ニ結フニ此両様ヲ考エテ其意ヲ得可

とあり，千梅は“残る螢”を秋まで残るのではなく，晩夏まで残る螢の意として，秋の螢と区別している．

これには異説があり，貞山は季寄・作法書『俳諧其傘[＊19]』（元文3年〈1738〉刊）で「残る螢としても夏也．朝へ残る也」と記し，同じく夏としているが，“残る”は季節的なものではなく朝まで残る時間的な意味だと捉えている．

『俳諧をだまき綱目』は5月に，『誹諧手提燈』『新式大成誹諧清鉋[＊30]』（不角著，延享2年〈1745〉以前刊）は4月に「螢 残螢」とあるので，残る螢については18世紀半ばでもなお夏と秋の両論があった．

残る螢を詠んだ句は，秋の螢と比較して少ないが，次のような作例がある．前の4句は貞門俳諧の作である．

秋までや残り螢のひとらかし	以専『鸚鵡集[＊31]』（梅盛編，明暦4年〈1658〉跋）
秋といふ文字にものこるほたるかな	良久『新続犬筑波集[＊32]』（季吟撰，万治3年〈1660〉刊）
花ならで残る螢や秋の余火	三吉『早梅集[＊33]』（梅盛編，万治2年〈1659〉序）
残る螢さて今も火と見え候か	無貞『加駕染[＊34]』（長之・一平編，天和1年〈1681〉刊）
窓ならで残る螢や塚の陰	大布『わが影[＊27]』（東吾編，享保20年〈1735〉刊）
しばし夜の葎にのこるほたるかな	雲崖『久怒木ずみ[＊35]』（撫泉編，慶応3年〈1867〉刊）

＊28：日本俳書大系17巻（1927）による．
＊29：岩波文庫による．
＊30：『俳諧袖かがみ』（国文学研究資料館蔵本），『篋蘆輪』（八戸市立図書館蔵本），『新式大成誹諧清鉋』（お茶の水女子大学図書館蔵本）［国書データベース］による．
＊31：愛知県立大学図書館蔵本［愛知県立大学図書館貴重書コレクション］による．
＊32：『新続犬筑波集』（岡山大学国文学資料叢書4，1995）による．
＊33：『詞林金玉集中巻』（図書寮叢刊，1973）による．
＊34：加越能古俳書大観上編（1936）による．
＊35：秋田俳書大系近世後期編（1983）による．

4-3. 狂歌

和歌と同じ形式をとり，世相・人情に即して滑稽に風刺をまじえて詠った狂歌にも，少ないが秋の螢が見られる．

秋螢

石やまのむかしはしらす秋もまたほたるの光り月にきそへり　　鈍少亭普拙

『狂歌新三栗集[*36]』(橙果亭天地根撰，文政 1 年〈1818〉刊)

石山は近江八景のひとつ「石山秋月」としても知られる月見の名所であるとともに，ホタルの名所としても知られていた．

秋螢

月やとる露かとみれは朝顔のつるはひのほるあきのほたる火　　東鶏館鳰丸

『狂歌手毎の花三編[*36]』(文屋茂喬輯，文化 9 年〈1812〉刊)

稲妻

おとろふる秋の螢の露の床に光りを添る稲づまの影　　年益

『俳諧歌兄弟百首[*37]』(四方真顔撰，文化 12 年〈1815〉序)

この他に狂歌には和歌と同じように晩夏のホタルを詠んだ

晩夏螢

水無月の末野ゝほたる夏やせてひかりもいつかほそくなりゆく　　颯々亭紗雄

『狂歌手毎の花初編[*36]』(文屋茂喬輯，文化 7 年〈1810〉刊)

螢秋近

秋もはや近きとてかは露に似て草葉の螢きえつ光りつ　　舩秤軒象丸

『嬾葉夷極集[*36]』(原素館尾田切丸撰，天明 6 年〈1786〉刊)

や，秋になって姿を消すホタルを詠んだ

秋夕

秋風に螢はきえて淋しやと虫も鳴出す野への夕暮れ　　升員

『狂歌浜荻集[*37]』(便々館湖鯉鮒編，文化 9 年〈1812〉刊)

露

夏過て螢や草にもどりけん草の光れる月の夜露は　　雛雄

『俳諧歌兄弟百首』

などの歌もある．雛雄の歌は中国の『礼記』月令「腐草為螢」を踏まえて，腐草から生じたホタルが秋に再び草に戻ったという歌．

＊ 36 : 近世上方狂歌叢書による．
＊ 37 : 江戸狂歌本選集による．

5. 中・近世の物語・小説と秋の螢

5-1. 王朝物語

5-1-1. 『伊勢物語』四十五段

流布本『伊勢物語[*4]』四十五段は次のような話である．

むかし，男ありけり．人のむすめのかしづく，いかでこの男にものいはむと思ひけり．うちいでむことかたくやありけむ，もの病みになりて，死ぬべき時に，「かくこそ思ひしか」といひけるを，親，聞きつけて，泣く泣くつげたりければ，まどひ来たりけれど，死にければ，つれづれとこもりをりけり．

時は六月のつごもり，いと暑きころほひに，宵は遊びをりて，夜ふけて，やや涼しき風吹きけり．螢たかく飛びあがる．この男，見ふせりて，

ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき

両親に大切に育てられた娘が，昔男に恋い焦がれ，病気となった．娘から事情を告げられた両親は男に知らせるが，男の駆けつけた時にはすでに娘は死んでいた．男は娘の喪に服することになった．6 月の暑い頃で，昼は管弦の楽を奏していたが，夜も更けると涼しい風が吹いてきた．高く飛びあがるホタルを，男は横になりながら眺め歌を詠む．このホタルの歌は後撰集巻三・秋に採られているものと同じである．

男がホタルの歌を詠むのは「六月のつごもり」，かろうじて夏であるが明日からはもう秋である．鈴木(1988)は“六月晦日”について「明日からは秋という夏の終りの日であるが，それは半年間の穢れを祓い流すなごしの祓いの日」「亡き魂の訪れ来るのを祠る日」と述べている．また，この章段のホタルについて「新たな詩的情趣をとりこめようともしている」とし，第一首目の歌を「その螢と雁によって，初秋の訪れをさわやかに印象づけようともしている」と評している．

『伊勢物語』には流布本とは別に塗籠本と呼ばれる系統本がある．[*38]塗籠本は本文にも独自のものがあり，この章段を二段分けている．

昔，宮仕へしける男，すずろなるけがらひにあひて，家に籠りいたりけり．時は水無月のつごもりなり．夕暮れに風涼しく吹く．螢など飛びちがふをまぼり伏りて

行く螢雲の上までいぬべくは，秋風吹くと雁につげこせ

塗籠本の前段部分である．上野（1969）は塗籠本を踏まえて次のように述べる．

前段は，「すずろなるけがらひ」つまり，なにか偶然のことで穢れにふれ，出仕を遠慮している男の歌ということになり，秋になってはやく解放されたいと，そのおとずれを待ちかねた歌になるであろう．哀傷の心は認めなくてよい．死の穢れは三〇日であり，雁の渡りは一〇月上旬，陰暦でも八月下旬以降であろう．六〇日さきの雁を待つというのは理解しがたいが，この歌はどこまでも許渾の翻訳で，螢と雁をわが国の暦日を無視して秋のものとしてよんでいるとみるべきである．おそらく，六月初旬に穢れにふれ，下旬に籠居のおわる秋を待ちかねた歌をよむ設定であろう．

歌の典拠となった許渾の詩句は『千載佳句』では秋興に配されており，中国の季節観ではホタルは秋の景物であるから，雁とともに詠じられることに問題はない．しかし，日本のホタルの季節観である夏，陰暦 5 月では，雁が渡ってくる 8 月下旬とは 3 ヶ月以上の違いがあり，ともに詠むには無理がある．上野(1979)は「中国の螢とわが国の螢との相違を知らなかった平安朝の貴族たちは，中国の歳時記や詩文にあわせて螢を晩夏や初秋のものとし，中国人のごとき季節感を獲得しようと努力したようだ」と述べているが，むしろ院政期頃から詠まれ始める晩夏の螢の歌と同じように，日本の伝統的な季節観である夏に留めたとは見られないだろうか．

＊38：上野（1969）より引用．

5-1-2.『うつほ物語』内侍のかみ

王朝物語が描いたホタルで最も良く知られているのは『[*4]源氏物語』第 25 帖「螢」であろう．

…螢を薄きかたに，この夕つ方いと多くつつみおきて，光をつつみ隠したまへりけるを，さりげなく，とかくひきつくろふやうにて．にはかにかく掲焉（けちえん）に光れるに，あさましくて，扇をさし隠したまへるかたはら目いとをかしげなり．（中略）ほどもなく紛らはして隠しつ．されどほのかなる光，艶なることのつまにもしつべく見ゆ．ほのかなれど，そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつるを飽かず思して，げにこのこと御心にしみにけり．

玉鬘の元へ忍んできた螢兵部卿は，光源氏が放つホタルの光で照らされた玉鬘の姿を見ることになるが，この螢の火で美女を見るという趣向は先行する『伊勢物語』第三十九段や『うつほ物語』「内侍のかみ（初秋）」にも見られる．特に『うつほ物語』は『源氏物語』にさまざまな影響を与えていることは多くの指摘があるが，『うつほ物語』[*4]の帝が敏蔭女の姿を見る場面は次の通りである．

> 上，いかでこの尚侍（ないしのかみ）御覧ぜむ，と思すに，大殿油ものあらはにともせばものし，いかゝにせまし，と思ほしおはしますに，螢おはします御前わたりに，三つ四つ連れて飛びありく．上，これが光にものは見えぬべかめり，と思して，立ち走りて，みな捕らへて，御袖に包みて御覧ずるに，あまたあらむはよかりぬべければ，やがて，「童べや候ふ．螢少し求めよや．かの書（ふみ）思ひ出でむ」と仰せらる．殿上の童べ，夜更けぬれば候はぬうちにも，仲忠の朝臣は，承り得る心ありて，水のほとり，草のわたりに歩（あり）きて，多くの螢を捕らえて，朝服の袖に包みて持て参りて，暗きところに立ちて，（中略）直衣の御袖に移し取りて，包み隠して持て参りたまひて，尚侍の候ひたまふ几帳の帷子をうちかけたまひて，ものなどのたまふに，かの尚侍のほど近きに，この螢をさし寄せて，包みながらうそぶきたまへば，さる薄物の御直衣にそこら包まれたれば，残るところなく見ゆる時に，…

同じように螢火で美女を照らしているが，季節は両者で大きく異なっている．『源氏物語』「螢」は5月であるのに対し，『うつほ物語』「内侍のかみ」では相撲節会（すまひのせちえ）の夜のこととして描かれているのである．相撲節会は奈良・平安時代にかけて行われた宮中行事で，7月7日に行われていたが，平城上皇がこの日に崩御したことにより国忌の日となり7月16日に移された．つまり『源氏物語』では夏の螢であるのに対して，『うつほ物語』では秋の螢として描かれているのである．

5-1-3.『源氏物語』幻

『源氏物語』[*4]第41帖「幻」は，四季折々ごとに亡くなった紫の上を追憶する光源氏の姿を描く．群れ飛ぶホタルを見た源氏が「夕殿に螢飛んで」と白楽天の「長恨歌」を口ずさみ，「夜を知るほたるを見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり」と歌を詠んだのは，蓮の花・蜩の声・撫子の花と点描されて螢へと続く，「いと暑きころ」の梅雨明け後の盛夏から七夕までの初秋の間である．上野（1969）はこの場面を『伊勢物語』四十九段を継承していることは明瞭であるとし，

> 六月下旬の特殊な螢を出現させ，「夜を知る螢」の歌は，「行く螢」の歌と同様に許渾の「蒹葭水暗螢知夜」を典拠にしている．螢をみて紫の上をおもうのは長恨歌の翻案であり，それをしめす「夕殿に螢飛んで」の故事を光源氏にくちずさませるが，螢と同一の典拠を重視すると，源氏物語は長恨歌との特殊な関係からこの場面を作ったとはいえない．伊勢物語の方法を正しく認識し，まったく同様の方法で物語を創作したのであり，四十五段に長恨歌を認めていたと考えられよう．

と述べている．となると，「幻」で描かれたのはやはり“六月の晦日”前後のホタルである．

『伊勢物語』四十五段も『源氏物語』「幻」も晩夏から初秋のホタルではあるが，「高く飛びあがる」（『伊勢物語』）・「いと多う飛びかふ」（『源氏物語』）という描写は，この時期に見られるヘイケボタルではなく，大型で印象的なゲンジボタルの特徴に拠っている．

5-2. 中世軍記物語

中世軍記物語『義経記』[*39]（作者未詳）の巻第五「静吉野山に棄てらるゝ事」では，吉野山の山中で義経と別れた静が供人にも去られ，山中を彷徨った果てに蔵王権現の燈籠の火を見つける．

> 十六日の昼程に判官には離れ奉りぬ．今日十七日の暮まで独り山路に迷ひける，こゝろの中（うち）こそ悲しけれ．雪踏み分けたる道を見て，判官の近所にやおはすらん．又我を棄てし者どもの，この辺にやあるらんと思ひつゝ，足を計りに行く程に，やう／＼大道にぞ出にけり．これは何方へ行く道やらんと思ひて，暫

く立ち休らひけるが，後に聞けば宇陀へ通ふ道なり．西を指して行く程に，遙なる深き谷に燈火幽に見えければ，如何なる里やらん，売炭の翁も通はじなれば，唯炭竈の火にてもあらじ．秋の暮ならば，沢辺の螢かとも疑ふべき．斯くて様々近づきて見ければ，蔵王権現の御前の燈籠の火にてぞありける．差入り見たりければ，寺中には道者大門に満ち／＼たり．静これを見て，如何なるところにて渡らせ給ふらんと思ひて，或御堂の側に暫らく休み，「是は何処ぞ」と人に問ひければ，「吉野の御嶽」とぞ申ける．

『吾妻鏡』の文治元年(1185)11 月 17 日の記事に，蔵王権現での静の証言が記録されている．陰暦 11 月なら現在の 12 月頃，『義経記』にも「雪踏み分けたる道を見て」と記述されているように季節は冬である．さすがに，ホタルを夏の節物とすると時期が離れすぎてしまう．そのため，作者は中国的なホタルの季節観である秋の螢を用いたとも考えられる．

＊ 39 :『義経記』（日本古典文学大系 37，1959）による．

5-3. 近世小説

5-3-1. 浮世草子

井原西鶴は談林俳諧師として活躍した後，浮世草子の作者に転身した．その最初の作品『好色一代男[＊40]』（天和 2 年〈1682〉刊）ではホタルを「螢みるなど催して，石山に詣でけるに，然も其日は四月十七日」（巻二ノ二「髪きりても捨られぬ世」），「けふは若草山のしげりを詠，暮てはひかりあるむしの飛火野，いま幾日過て京にかへるも惜しまれ，其比は卯月十二日（巻二ノ四「誓紙のうるし判」）」と夏の景物として描写している．しかし，巻五ノ三「欲の世中に是は又」の播州室津の遊郭で描かれるのは秋の螢である．

亭主床とつて，蚊屋釣懸て，「是へ」と申程に，「夢見よか」とはいりて，汗を悲しむ所へ，秋までのこる螢を数包て，禿に遣し，蚊屋の内に飛して，水草の花桶入て，心の涼しきやうなして，「都の人の野とやみるらん」といひさまに，寝懸姿のうつくしく，「是はうごきがとられぬ」と，首尾の時の手だれ，わざとならぬすき也．…

浮世草子には他に『風流[やさ]詭平家[＊41]』二巻の三・恪気は天狗の懐娘（未練作（推定），正徳 5 年〈1715〉刊）の「残る螢の四つ三つ二つかすかに飛ちる貴布祢川のながれをつたふて」，『色[＊17]の染衣』四・壁ひとへ隣ハをそろしや地獄（不角作，貞享 4 年〈1687〉刊）の「秋迄残る螢火に，俤[かげ]ハもえて夢覚ぬ」があり，『武道[＊17]一覧』（北条団水作，貞享 4 年刊）巻七，『忠孝寿門松[ねびきの][＊41]』巻一ノ二（八文字屋自笑作，元文 3 年〈1738〉刊）では火花の比喩として“残る螢”が用いられている．

＊ 40 : 対訳西鶴全集 1 巻（1992）による．
＊ 41 : 八文字屋全集による．

5-3-2. 読本

平安時代末，保元の乱に敗れた源為朝が，流された大島から琉球に逃れ，その子が初代琉球王舜天となったという伝説をもとにしたのが曲亭馬琴の読本『椿説弓張月[＊38]』（文化 4 年〈1807〉～ 8 年〈1811〉刊）である．保元の乱前後の為朝の活躍を描いた前篇・後篇と，伝説をもとに創作した続篇・拾遺・残篇からなり，秋の螢は後篇と拾遺でそれぞれ使われている．後篇巻之六・第廿九回では「宵闇なれば，筆の運びも定かならず．折しもあれ一団の燐火[おにび]，叢の中より燃出て，手元[たなもと]を照らすにぞ，秋の螢か鬼火かと怪しみながら」と，拾遺巻之五・第五十六回では「その火八方に散り乱れて，秋の螢の飛ぶごとく」と，鬼火や火が燃え広がる様子を秋の螢に喩えている．

馬琴の代表作『南総里見八犬伝[＊29]』（文化 11 年〈1814〉～天保 13 年〈1842〉刊）の第六輯巻之五下冊・第六十一回では離別された妻が心情を訴えるなかに「遠山里の草の戸に，秋の螢と身をなして，あくがれて

のみ来るものを」がある．「あくがれてのみ来るものを」は和泉式部の歌「ものおもへばさはのほたるもわがみよりあくがれいづるたまかとぞみる」（後拾遺和歌集巻 20・雑六）に拠っている．

馬琴は漢籍や元・明小説から取材・模倣しており，その読本は漢語が多用されているために中国風味が濃厚とされる．『椿説弓張月』も『南総里見八犬伝』もホタルは比喩として使われていて夏の螢であっても問題はないが，馬琴の好みからあえて中国的な秋螢を使用したのであろう．

6. 浄瑠璃・歌舞伎と秋の螢

明暦～寛文（1655 ～ 73）頃に流行した，金比羅浄瑠璃の『すへたけたん生[*42]』は，源頼光の四天王の一人，卜部季武の生誕を物語る．六段目の詞章「ほたるやかすかにとひつれて，のへのおくり火をともし」は道に飛ぶホタルを野辺の送り火に喩えているが，「すゝむし松虫なきつれて」と続くので季節は秋である．

源義経の島渡り伝説を踏まえた古浄瑠璃・角太夫正本『牛若弁慶島渡[*43]』第四（延宝 5 年〈1677〉以前作）には「すぎにしなつのなごりにや．みぎはのいけの水かれて．もくさにのこるほたる火は．あまつそらなるほしやらん」があるが，この「のこるほたる火」も前後の詞章から秋の螢である．

近松門左衛門の作品では

秋のほたるのもへてはきえ，きえてはもえ

『薩摩守忠度[*44]』第四・菊のまへ道行（貞享 3 年〈1686〉10 月・竹本座興行）

さながらあきのほたるとびかふ宇治川の，あじろどうろう

『嫗山姥[*44]』第四・美濃国能勢判官館（正徳 2 年〈1712〉9 月以前・竹本座興行）

ふじさへ見へぬやみの夜のこよひ一夜は十五夜の．月にぞかへまほしのかげ，ちら／＼．ちら／＼ほたる火か．いや兄弟のなきたまよ．

『曽我会稽山[*44]』第四・虎少将道行（享保 3 年〈1718〉7 月・竹本座興行）

など比喩ではあるが，秋の螢が用いられている．

小栗判官照手姫の伝説を元にした『当流小栗判官[*44]』第二・横山屋敷（正徳 4 年〈1714〉9 月以前・竹本座興行）にも秋の螢が現れるが，単に詞章としてではなく話の筋にも関わっている．

… 去ながらほたるは夏の物成に今のほたるはいつわりならん．たとへ有共火はとぼさじとの給へば．後藤がつま承り．さればほたるは水にしたがひながれて下り候ゆへ．都方にもせたよりうぢはおそきとかや．川水のはてむもれさは秋のほたるとこかにもつらね．ひかりは夏よりあきらか也．こよひおにはにはなされて．とぼさぬほたる一つにても候はゞいかやう共はからひ給へと．ほたるよりげに詞のひかりあざやかにこそ申しけれ．

後藤左衛門国忠が命の恩人小栗と照手姫の仲を取り持つために，妻を虫売りに化けさせて横山屋敷に入り込ませる．照手姫は虫をすべて庭に放つように命じるものの，ホタルは夏のものなので偽物だろうと疑う．それに対して後藤の妻は，証明のため一夜を屋敷で過ごすことを申し出る．夜に判官と後藤が屋敷に忍び込むと，照手姫と後藤の妻は螢籠を明かりにして庭に出てくる．

浄瑠璃が衰退した宝暦（1751 ～ 64）以降歌舞伎が隆盛を迎える．桜田左交（三代治助）・篠田瑳介作の歌舞伎『花兄弟十二月所作（ねんぢゆうぎやうじ）』七月・七夕娘（天保 11 年〈1842〉3 月・江戸市村座初演）にも，「秋[*45]はみだれて結ぼれとけて．野もせを照らし飛ぶ螢．うつすや水の影ゆかし」と浄瑠璃と常盤津の掛け合いがあったことが見える．

＊ 42：金平浄瑠璃正本集による．
＊ 43：古浄瑠璃正本集による．
＊ 44：近松全集による．
＊ 45：日本歌謡集成巻 9 近世編（1942）による．

7. 近現代の日本文化における秋の螢

7-1. 俳句

俳諧は明治時代に正岡子規によって新たに俳句という文学となった．明治 5 年 (1872) に暦が太陽太陰暦から太陽暦に変更されたが，俳句は新たに新年を部立するものの，[(2)]四季は気象学的季節ではなく，従来の伝統的季節・節月区切りに従い，「秋螢」「秋の螢」「残る螢」は引き続き立秋後のホタルを指す初秋の季語となる．

〈秋の螢〉

[*46]改造社版『俳諧歳時記 秋』（昭和 8 年〈1933〉）には「秋の螢は夏の螢の産卵より発生したものなり」と解説されており，同様の記述は『[*46]新撰歳時記』（今井柏浦編，明治 41 年〈1908〉）や『[*46]新修歳時記』（中谷無涯編，明治 42 年〈1909〉）にも認めらる．しかし 8 ～ 9 月に発生するヘイケボタルは，前年に産卵された個体である．

秋螢の俳句で最もよく知られたのは，親交のあった芥川龍之介を悼んだ飯田蛇笏の次の句である．

芥川龍之介氏の長逝を深悼す

たましひのたとへば秋のほたる哉　　『山廬集』（飯田蛇笏集成 1 巻，1994）

蛇笏は秋の螢のはかなげな光のさまを，別れを告げに来た芥川龍之介の魂と見た．蛇笏は秋螢に思い入れでもあったのか，47 句のホタルの句のうち秋の螢が 10 句を占めている．

子規以降，現在まで秋の螢はかなりの数の句が作られているが，以下，若干の例句をあげておく．

消えもせでかなしき秋の螢かな　　正岡子規『はて知らずの記』（子規全集 13 巻，1975）

「はて知らずの記」は子規の東北旅行（明治 26 年〈1893〉）の紀行文で，新聞「日本」に連載された．

秋の螢尾花が袖にすがりたる　　福田把栗『[*46]春夏秋冬』（虚子・碧梧桐編，1902）

福田把栗は僧侶・漢詩人で，子規門の俳人でもある．この句は日本派の俳句選集『春夏秋冬』に採られている他，寒川鼠骨編『[*46]歳時記例句選』（明治 36 年〈1903〉刊）や柏浦の『新選歳時記』にも例句としてあげられている．

ゆらゆらと秋の螢の水に落つ　　寺田寅彦『落穂集』（寺田寅彦全集 12 巻，1961）

瀬をのぼるうすきひかりの秋螢　　石原八束『操守』（石原八束句集，1978）

秋螢放てば草に縋りけり　　宮下翠舟『追儺豆』（1980）

秋螢草葉の闇のゆるびなり　　山口草堂『四季蕭蕭』（山口草堂全句集，2001）

秋ぼたる平家ばかりとなりにけり　　宮澤　薫『新樹しぐれ』（2019）

単に平家螢と詠めば夏の季語となる．自作解説によると詠者は 8 月の長野県辰野町で飛び交うヘイケボタルの淡い光に心惹かれて詠んだそうである．辰野町はホタルの名所として知られるが，8 月ともなるとゲンジボタルはすっかり姿を消す．ゲンジボタルとヘイケボタルの発生消長は，この句に端的に表れている．

〈残る螢〉

残る螢について，改造社版『俳諧歳時記』に「夏季とする説，秋の螢と同じとする説等あれど，夏の螢の秋に生残れるを云ふを妥当とせん」とあり，歳時記では概ねこのような解釈が一般的なようである．それに対し，昆虫学者の大町文衛は「生き残ったものという意味ではなく，季節的に残ったと解釈すべきで，ホタルの寿命はだいたい二〇日ぐらいであるから，長く生き残るとは考えられない．おそらく羽化したものをいうのである」と否定している（大町，1973）．

江戸時代と同様，残る螢の作句もわずかなようで，確認できた例句は多くない．

草の露に濡れつゝ残る螢かな　　洞蕭史『最新明治句集』[*46]（伊達秋航編，1910）

インターネットからは近年の句として以下の句を拾うことができた．

広野ゆく残る螢のゆくへかな　　有松洋子「槐」[*47] 2016 年 8 月

またたきをはやめて残る螢かな　　松村蒼石『露』[*46]（1960）

〈病螢〉

現在の歳時記では初秋の季語とされている“病螢”だが，江戸時代の季寄・歳時記での例は未見である．『華実年浪草』[*7]（麁文著，天明 3 年〈1783〉刊）秋・七月の「秋の螢」に「紀事に曰京師児童謂ニ秋螢ニ称ニ病螢ニ敢不レ捕レ之」とある．紀事は黒川道祐の『日次紀事』のことだと思われるが，ここに引用されている文は見当たらない．前出の大町文衛は「病螢というのは活動が鈍く，弱々しく見えるからで，病気ではない」と生物学的な知見を踏まえて解説している．

病螢で詠まれた俳句は珍しく，筆者が見たのは以下の句だけである．

病み螢けふもおもたきまま昏るる　　宇都宮滴水「京鹿子」[*47] 2005 年 8 月

生も死もあなたまかせの病螢　　田口鷹生「面」[*47] 2014 年 1 月

思ひ寝とみわけがたくて病螢　　清水径子『哀湖』（清水径子全句集，2006）

病螢苦しくなれば寝てゐます　　平井照敏『天上大風』（現代俳句集成 17 巻，1982）

＊46：国立国会図書館デジタルアーカイブによる．

＊47：Web サイト「俳誌のサロン・歳時記」による．

7-2. 短歌

明治中期以降の近現代短歌では，従来の夏の螢だけでなく秋の螢も詠まれるようになった．『現代短歌分類辞典』（津端修編，1942）は，明治から昭和 32･33 年頃までのおもな短歌 40 万首が用語別に分類されている．「ほたる」の項目には 541 首の歌が採られているが，秋の螢を詠んだ歌を 13 首ほど拾い出すことができた．そのうち「秋螢／秋の螢」が使用されている歌が 5 首あった『現代短歌分類辞典』から秋の螢を詠んだ短歌をいくつかあげておく．

秋に入る空をほたるのゆくごとくさびしやひとの忘られぬかな　　若山牧水

この山に秋たちてよりあらくさの草むらなかに螢ひかりぬ　　斎藤茂吉

秋づきて露草叢にさ夜ふかく光る螢をあはれみにけり　　結城哀草果

秋ほたる稲葉にひとつとまりゐてくまなく照る月のひかりは　　梶原九八郎

脱ぎ捨てし単衣の上に来てとまる秋の螢の青き息づき　　若山牧春

頸赤きほたるが秋の水草の葉うらを這へばなげかひにけり　　熊谷武雄

やや寒き夜風の穂波けはひにも暗き野面に秋螢飛ぶ　　荒木暢夫

7-3. 現代小説

現代小説で秋の螢が使われている例はほとんどが時代小説で，多くはシリーズ物の短編である．平岩弓枝「秋の螢」（『御宿かわせみ 上』所収，1980），「目黒川の螢」（『神かくし』所収，1990），澤田ふじ子「水の螢」（『夕鶴恋歌』所収，1989），今井絵美子「秋螢」（『秋螢』所収，2009），井川香四郎「秋螢」（『秋螢』所収，2008），別所真紀子「残る螢」（『残る螢』所収，2004），坂岡真「病み螢」（『病み螢』所収，2007），千野隆司「残り螢」（『残り螢』所収，2010）などの作品がある．

平岩弓枝の「目黒川の螢」では目黒川と綾瀬川に螢見物に出かけるが，「ここらの螢はこぢんまりして品がいいな．目黒川でみた奴なんぞ，この三倍もでっかいぞ」というセリフがあるので，目黒川はゲンジボタル，

綾瀬川はヘイケボタルと考えられる．目黒は斎藤月岑の『東都歳事記』(天保 9 年〈1838〉刊）にあげられているホタル（ゲンジボタル）の名所である．しかし，本作中でホタルを見るのは 7 月半ばのようなので，ゲンジボタルでは時期的に合わない．

今井絵美子の「秋螢」では後の月（陰暦 9 月，現在の 10 月）の月見の晩，「水の螢」も陰暦 9 月半ば頃に登場させているが，ヘイケボタルでもこの時期まで見ることはほとんどない．ただし，稀に二化と推定される個体が 10 ～ 11 月に記録されている．「残る螢」で見るのは，東海道保土ケ谷宿，現在の神奈川県横浜市の葉月十二夜の晩，現在の 9 月中旬頃のことである．

「病み螢」は旧暦 7 月～ 8 月半ば頃の話で，元目明かしの「今時分になると，螢も元気がねえ．家に帰りつくころにゃ，光も途絶えがちになりやしてね，翌朝にゃ一匹残らず死んじまった．へへ，とんだ病み螢でしたよ」のセリフがある．

「残り螢」は元妻と妾の 4 人による復讐譚であるが，復讐の相手玉三郎を「所詮あいつは秋螢 …… 精彩はなく，盛りの頃の輝きなんか何もないのにねえ」と秋螢に喩えている．

天照大神から四神，朱雀・青龍・白虎・玄武の子育てを無理やり任されることになった羽鳥梓の子育てに奮闘する姿を描いた霜月りつのライトノベルのファンタジーシリーズ『神様の子守はじめました』9 巻第 5 話「神子たち，キャンプへ行く」（2018）では，秋に神子たちにホタルを見たいとねだられた梓が，神子達の守役・水精の翡翠に教えられ，秋でもホタルが見られるという場所へと出かける．そこで見たホタルの描写はゲンジボタルを思わせる．

竹田久子「秋のほたる」（『秋のほたる』所収，2003）は，地方都市を舞台に，夜逃げをした井田に町工場を貸していた大家の友子の視点から，怪しい動きをする保証人，残された日記でのみ語られる井田の妻，縊死する妻の連れ子などの人間模様が描かれている．9 月に入り犬の散歩の途中，畦の草にホタルが光っているのを見つけた友子は，「数日の命を，雌にせよ雄にせよたった一つで光り続ける姿は如何にも淋しく」感じる．

7-4. 歌謡曲と演劇

現代歌謡曲でも歌詞にホタルが使われている例は多いが，秋の螢は演歌で見られる．失恋した女性を秋の螢に喩えた野中彩央里「秋螢」（木下龍太郎作詞，2007），前川テル子「秋の螢」（薪川あらた作詞，2020）や，叶わぬ恋心を秋の螢に喩えた梅沢富美男「秋螢」（根津洋子作詞，2006），三善英史「秋･恋ほたる」（さくらちさと作詞，2017），城之内早苗「酔月夜」（喜多條忠作詞，2017）がある．

演劇では 1988 年 NHK ETV「芸術劇場」で放映された「秋の螢」（鄭義信脚本）がある．都会の片隅にある公園でボート屋を営むタモツとおじの修平のもとに，失業中のサトシ，妊婦のマスミがやってきて一緒に暮らし始める．はじめは反発しあっていたが，いつしか家族のように意識しはじめる 4 人が，季節はずれのホタルに …．近年でも 2001 年文学座，2007 年 “ それいけ ! まっつぁん ”，2013 年財団法人可児市文化芸術振興財団により公演されている．

8. 現代日本人のホタルの季節感

8-1. 現代文化螢学最大の謎

太陽暦への移行により，秋の螢は伝[(2)]統的季節の初秋から気象学的季節の真夏の虫となるが，福井大学の保科英人は真夏のホタルについて一つの問題提起を行っている．

保科は 2017 年と 2019 年に 1 ～ 4 回生の学生各 122・106 人に「ホタルは何月頃に見られると思うか？」とのアンケート調査を行った（保科，2017・2019）．回答はいずれかの単月のみとし，1 ～ 3 月のような期

間回答は不可としている．また，アンケートではホタルとのみ問い，意図的にゲンジボタル・ヘイケボタルの種名は避けている．その結果は 1 ～ 4 月・11 月～ 12 月と回答した学生は 0 人，5 月 13 人，6 月 51 人，7 月 80 人，8 月 62 人，9 月 20 人となっており，10 月と答えた学生が両年とも 1 人ずついた．保科は最も回答数が多かった 7 月について“梅雨明け前の上旬”と“夏本番の下旬”では意味合いが変わってくるとしながらも，8 月と合わせて「半分以上の学生はホタルを真夏の虫と思っている」と解釈したいとしている（保科，2017・2019）．この調査で対象となった学生の出身県は，福井・石川・岐阜・愛知・三重などの東海北陸の県がほとんどであることから，筆者もその解釈は妥当だと考える．

保科は「ホタルは初夏が見頃」との科学的知見に触れる機会が十分ありながら，多くの学生や一般市民が「ホタルは真夏の虫」と認識していることを指摘し，保科自身も大学一回生の時に所属するサークルの先輩からホタルを見に誘われるまで同様に思い込んでいたと述べている．そして保科はこの「なぜ多くの日本人はホタルを真夏の虫と勘違いしているか？」を現代文化螢学最大の謎としている．

8-2. サブカルチャーにおける真夏のホタル

保科（2017・2019）によると現代サブカルチャーの虚構世界でもホタルが見頃の初夏よりも真夏の風物詩として描写されていることが少なくないとし，電子ゲームやアニメの具体的な例があげられている．

筆者もアニメとマンガの作品をいくつかあげておきたい．アニメでは『事情を知らない転校生がグイグイくる.』4 話（2023 年）にヒロイン西村茜と主人公高田太陽がホタルを見るシーンがあり，番組冒頭に「8 月に入りました」というナレーションが入るので時期は 8 月上旬である．

マンガには秋本治『こちら葛飾区亀有公園前派出所』109 巻「郷愁の螢小夜曲の巻」(1998)，北崎拓『なぎさ Me 公認』「花火大会で …」（1997），イタバシマサヒロ原作・玉越博幸作画『BOYS BE…』25 巻「テントひとつの Camping Night♡」（1995），西岸良平『三丁目の夕日 夕焼けの詩』第 23 集「蝉しぐれ」（1987），なんばくに『8 月の螢』の表題作「8 月の螢」（1993）があり，いずれも 7 月下旬から 8 月の真夏の設定である．生息環境からは『BOYS BE…』『8 月の螢』はヘイケボタルが，『こちら葛飾区亀有公園前派出所』『なぎさ Me 公認』はゲンジボタルが該当しそうである．『夕焼け詩』は陸生のヒメボタルのようだが．時期が 7 月下旬と考えられるので山地であればヒメボタルの発生時期とも矛盾しない．

二次元虚構世界で真夏のホタルが描かれる理由について保科（2017）は次のように述べている．「クリエーターにとって学生キャラクターの恋愛物語を進展させるのに 8 月は大変使い勝手が良い月だ．何と言っても開放的な季節だし，7 月 20 日以降はキャラクターを教室から解き放ったうえ水着や浴衣を着せられる．そして，カップルないしは友達以上恋人未満の男女がホタルを見つめるシーンはベタではあるが，効果的な演出だ．ホタルを 8 月に飛ばしても決して生物学的に間違いではない・・・・，そんなこんなで二次元虚構の世界では，ホタルたちはやや季節外れの 8 月に夜陰に颯爽と乱舞しているのではなかろうか」

8-3. 現代小説と真夏のホタル

真夏のホタルが描かれた小説では野坂昭如『火垂るの墓』（1967）がよく知られている．第二次世界大戦の空襲で戦災孤児となった 14 歳の清太と 4 歳の節子が懸命に生きていく姿を描いていて，作中 6 月の初夏から，9 月 21 日に清太が衰弱死した三宮駅前の草むらで飛ぶホタルまで，たびたびヘイケボタル（6 月のホタルも「平家螢」と記されている）が登場する．

川口雅章の『虹色ほたる～永遠の夏休み～』（2007）は小学 6 年生の主人公がある山奥のダムの近くでタイムスリップし，ダムに水没する前の村で一夏を過ごす SF ファンタジー．ここで描かれているホタルは，8 月後半まで出現する特別なゲンジボタルという設定である．

内田康夫が生んだ探偵，浅見光彦が小学校 5 年生のときに遭遇した最初の事件を描いたのが『ぼくが探

偵だった夏』(2009)．光彦は長野県の軽井沢で立秋の頃にホタルの大群に遭遇するが，光の描写からはゲンジボタルといえそうである．

8-4. ホタルの発生期と感覚的季節感のずれ

ホタルの発生期と感覚的な季節感のずれについて保科（2019）は「憶測を述べる事が許されるならば」としながらもひとつの考え方として,「この『着物をめかし込んだ人々による,奥ゆかしい伝統的なホタル観賞』との漠然としたイメージが，いつか『浴衣を着てホタル観賞』へと変化し，やがて『浴衣姿の人々が夏祭りの日にホタルを見物する』との思い込みに至った．（中略）ホタルの実物を見る機会がない都会人であれば，この思い込みを是正する機会がなくても不思議ではない」と述べている．

この問題について筆者なりの見解を示してみたい．筆者はこの問題は特定の要因ではなく，保科の考察を含めいくつかの要因が複合して生じたのではないかと考えている．

一つめは，夏の季節感の問題である．ホタルは古来から夏の虫として認識されてきた．しかし，日本では夏は特殊な季節でもある．夏[(2)]の期間はいくつかの定義があるが，現代では一般的に 6 ～ 8 月が夏とされる（気象学的季節）．このうち，6 月～ 7 月中旬頃は梅雨であり，梅雨は夏というよりも独自の季節のイメージがある．たとえば，暑中見舞いを出す時期は小暑（7 月 7 日頃）から立秋（8 月 7 日頃）とされているが，実際には梅雨明け以降を目安に送ることが多いようである．また，2010 年代以前は小学校～高等学校では 7 月 21 日～ 8 月 31 日が夏休みであったことから，梅雨後の盛夏となる 7 月下旬から 8 月が夏とイメージされていったと考えられる．そのため，夏の虫とされるホタルに，実際の発生期の梅雨時（初夏）よりも梅雨明け後の真夏のイメージが形成されたのではないだろうか.

二つめは，幼少期の体験である．1955 ～ 1973 年の高度経済成長期は地方から労働力として若年層を中心とした多くの人が都市部へ移入してきた．都市部の人口の急激な増加は，郊外へと宅地開発が広がり，急速に自然が失われホタルの姿も消えていった．こうした新興住宅地で育った子ども達が身近にホタルを見ることはほとんどなく，ホタルを見る機会として考えられるのは，夏休みに帰省した父母の田舎や家族旅行などの旅行先である．保科（2019）はヘイケボタルを初夏の昆虫とするが，倉田（2010）や柏崎市博物館[(1)]文化課が述べているように，かつては旧盆の頃まで普通に発生していたと考えられる．実際，筆者も初めてホタルを見たのは夏休みの 7 月下旬，祖父のところであった．こうした夏休みにホタルを見るという経験から，発生期を初夏ではなく真夏と認識したとしても不思議ではない.

三つめは，サブカルチャーによる影響である．保科（2017）も「本稿で例としたのは僅か上記ゲーム 3 作品だが，うちの一部の大学生がホタルを真夏の虫と思い込む一因は，サブカルチャー諸作品からの影響もあるのではいか」と述べているが，そうした可能性は十分あるだろう．ゲームやアニメ・マンガのクリエイター達がホタルを真夏の昆虫と認識していたり，幼少期の夏休みに見た体験を持っていれば，恋愛物語を進展させられる真夏にホタルを飛ばすというシチュエーションを違和感なく作品に取り込んだであろうし，そうした作品に触れた人達がホタルを真夏の昆虫と思い込む一因になったこともあったであろう．特にある時期，毎年のように終戦の日近辺で TV で放映されていたアニメ『火垂るの墓』（高畑勲監督，1988）などは，TV という媒体を考えるとゲーム以上の影響力があったと考えられる.

9. 秋の螢とヘイケボタル

いくつかの歳時記の「秋の螢」の解説から特徴をあげると，①ホタル本来の発生期ではなく立秋後の季節はずれに見られる，②その光は弱々しい，③活動が不活発である，となろう.

これらの特徴はいずれもヘイケボタルに当てはまる．発生期は 1 章で見たとおり地域や生息環境によっ

て異なるが，5 月下旬から 8 月下旬，時に 9 月以降まで見ることがある．それに対してゲンジボタルは東北地方で 7 月であるが，本州～九州の低地では 5 月中旬～ 6 月下旬で，秋螢の時期とは一致しない．また，ゲンジボタルと比較して小型なためその発光も弱く，また発光パターンもゲンジボタルに比べて弱々しく見える．飛翔行動も比較的低い高さを飛びまわり，また稲の葉などに止まって光っていることも多いことから活動が弱々しく感じられるのであろう．歳時記で「秋の螢」をヘイケボタルと明記しているのは，筆者が確認した限りでは『カラー図説 日本大歳時記』（飯田龍太解説，講談社刊）と『角川俳句大歳時記』（野中亮介解説，新旧版とも）だけであったが，一般的にもヘイケボタルと認識されていると思われる．

日本人の四季の季節感・自然観は平安時代の「王朝びと」（後期王朝人＝平安朝の支配者階級）によって形成され，その影響下に時代とともに庶民へと拡大されていった（西村，1979）．その王朝びとの秋の季節感は，『万葉集』の「色彩感覚に満ちた秋」から『古今和歌集』の「もの悲しい，さびしい秋」へと転換され（西村, 1979）, それが現代まで続く伝統的な季節感となっている．俳句には秋の螢以外にも「秋の蠅」「秋の蚊」「秋の蜂」「秋の蝶」「秋の蝉」と秋を付けることによって，本来の季語（春の蝶，夏の蠅・蚊・蜂・蝉）から秋の季語になった昆虫があり，いずれも季節はずれのあわれさや弱々しさが本意である．しかし，立秋を過ぎてもカの勢いは衰えないし, アブラゼミやミンミンゼミもまだ喧しく鳴いているのである．結局，王朝びとによって確立されたさびしい秋・もの悲しい秋が，ホタルにもこれらの昆虫にも投影されているにすぎない．とはいえ，もしゲンジボタルが初夏から初秋まで発生する昆虫であったなら，あるいはアキマドボタルが日本本土[注4]にも生息していたら，秋の螢のイメージは現在と同じだったのだろうか．「詩歌の場合は，その実景というよりも，多くの悲愁の象徴としてとらえられるようである」（飯田，1983）とは言いながら，ヘイケボタルの存在が秋の螢のこうしたイメージを損なうことなく，むしろ助長したのではないだろうか．

注 4）アキマドボタルは長崎県対馬には生息しているが，文学へ影響を与えることはなかった．

おわりに

日本文学において秋の螢が用いられている事例を，江戸時代までの詩歌や物語，浄瑠璃・歌舞伎，ならびに近代以降の俳句や短歌・小説・歌謡曲などで概観した．また，和歌から派生した連歌で秋の螢の句が詠まれるようになった経緯を検討するとともに，俳諧･俳句の季語「残る螢」「病螢」についても考証を行った．平安物語の秋の螢の描写は，この時期に見られるヘイケボタルではなく，初夏に発生するゲンジボタルの特徴を表している．こうした表現は現代の小説やマンガでも見ることがあり，日本人にとってホタルのイメージ，発光や行動・発生数などがゲンジボタルによって形成されたためと考えられる．一方，江戸時代の俳諧にはヘイケボタルの行動や発光の特徴を踏まえた句も見られる．

明治の暦法の改正により秋の螢は真夏の螢となったが，8 章では現代小説やアニメ・マンガにおける真夏の螢の用例を見るとともに，保科の問題提起した現代人の多くがホタルの出現期を真夏と認識している要因について考察した．

引用文献

東　光治（1935）萬葉動物考．人文書院.

保科英人（2017）近現代文化蛍学．さやばねニューシリーズ , (26): 38-26.

保科英人（2019）現代文化蛍学最大の謎 ― 二次元世界でホタルはなぜ真夏に飛ぶ？．『大衆文化のなかの虫たち 文化昆虫学入門』（保科英人・宮ノ下明大共著）．論創社.

飯田龍太（1983）秋の螢解説．カラー図説 日本大歳時記 座右版（講談社編）．講談社.
川口久雄校注（1966）菅家文草 菅家後草 日本古典文学大系 72．岩波書店.
倉田富夫（2010）会員便り／平成 21 年のホタル．全国ホタル研究会情報交換誌 , (32): 5-6.
黒川洋一ほか編（1989）中国文学歳時記 秋 [下]．同朋舎出版.
松田久司ほか（2008）横浜自然観察の森における水生ホタル類成虫の 2 種の 21 年間の発生数変化．神奈川自然誌資料 , (29): 143-149.
松田久司・黒田慧史（2013）大洲市平野町野田におけるヘイケボタルの幼虫と成虫の観察記録．南予生物 , 17: 53-56.
松浦友久編（1999）漢詩の事典．大修館書館.
西村　亨（1979）王朝びとの四季．講談社（講談社学術文庫）.
丹羽博之（1992）平安朝和歌に詠まれた螢．大手前女子大学論集 , (26): 85-100.
野口一雄（1995）中国の四季 漢詩歳時記．講談社（講談社選書メチエ）.
野中亮介（2006）「秋の螢」解説．角川俳句大歳時記（角川学芸出版編）．角川学芸出版.
野中亮介（2022）「秋の螢」解説．新版角川俳句大歳時記（角川書店編）．KADOKAWA.
大場信義（1986）ホタルのコミュニケーション．東海大学出版会.
大町文衛（1973）「秋の螢」解説．図説俳句大歳時記 秋（角川書店編）．角川書店.
奥村郁子（1991）『和漢朗詠集』の撰集意識 ―「螢」をめぐって ―．高校教育 , (43): 1-9．金沢大学教育学部附属高等学校
斎藤月岑（1980）東都歳事記．日本名所風俗図絵 4 江戸の巻 II（朝倉治彦編）．角川書店.
鈴木日出男（1988）物語歳時記（四）螢．国語通信 , 304：31-37.
朱秋而（1995）菅茶山研究－螢詠を中心として－．国語国文 , 64(11): 13-28.
高橋秀樹編（2017）新訂吾妻鏡二 頼朝将軍記 2．和泉書院.
山崎みどり（1984）螢のイメージ．中國詩文論叢第三集 : 30-44.
上野　理（1969）伊勢物語の藤と螢．東洋文学研究 , (17): 52-65．早稲田大学東洋文学会.
上野　理（1979）伊勢物語と海彼の文学．國文學 解釈と教材の研究 , **24**(1): 73-79．學燈火社.
渡辺　実校注（1991）枕草子 新日本古典文学大系 25．岩波書店.

引用サイト

(1) 柏崎市博物館文化学芸課：自然・景観／ホタル　https://www.city.kasiwazaki.lg.jp/sosikiichiran/kyouikuiinkai/hakubutukann/1/10/1/6597.html［2023.12.3 閲覧］
(2) 国立天文台天文情報センター暦計算室：wiki 暦／季節とは https://eco.mtk.nao.ac.jp/kyomi/wiki/B5ABC0E1.html［2023.9.20 閲覧］